

NHK教育TV「心の時代」に出演

昨年12月14日(日)、延原君はNHK教育TVで一時間にわたりインタビューを受け、彼の生い立ち及びテレマン協会の誕生・その後の活動が紹介されました。ご覧になった方も居られると思いますが、その一部を再現させていただきます。

私が彼と毎日のように遊んだ頃、彼は、姜武春(キョウ・タケハル)と名のついでいました。番組の中で彼は小学校時代を過ごした千里山ではいじめや嫌がらせはなかったと語ってくれましたが私の記憶と少し異なります。でも、今から考えると、私を含めいじめっ子の服装は、お古でダブダブ且つツギハギだらけ ドロドロのズック靴はどこどころに穴が開いていました。

一方、彼の服装は前回紹介しましたように新調でござっぱりしたものです。帽子はコルク入りのヘルメット(ターザンの映画でお馴染みのアフリカ探検隊が被っていたようなあの格好いいもの)。まあ、やっかみの方が強かったのかな?と思います。このNHKの番組でも明らかにされております。

1982年、日本テレマン協会で初のドイツ公演を計画。韓国籍では当時の東ドイツに入国できないと知ると、お母さん・叔父さんの大反対を押し切って、日本国籍に変えたとのこと。彼が39歳の時です。音楽のためならそれ以外のことなど、特に国籍など大した問題ではないとの彼の思いが伝わってきます。

彼は中学まで画家を目指していたとのこと。その中学時代の途中で豊中に引越し、中学はそのまま一中を卒業。引越し先の豊中に大阪音楽大学付属高校があり、そこからが音楽の道への出発点です。高校時代から彼はオーボエを始め、大学在学中にテレマン・アンサンブルを結成。18世紀の西洋音楽の真髓が教会にあり、教会から西洋音楽が生まれたこと。知り合いの伝で夙川カソリック教会の地下を練習場として使わせてもらえたこと。そのお礼としてこの教会でチャリティーコンサートを何度も催したこと。そしてなによりもパッサ、ヘンデル、テレマン等の曲を演じるにはキリスト教を理解しなくては無理ではないか、彼ら作曲家はどのような気持ちでキリストを理

したが、彼のお母さんは李王朝の血を引かれているとのこと。彼の教育には、このお母さんとヨーロッパへの留学が決まっていたのが太平洋戦争のために中止となったインテリの叔父さんの影響が強かったそうです。

- ① 日本で生きていくには、芸術しかない。
- ② 韓国語は覚えるな。国際人になれ。
- ③ 日本での民族運動(南北朝鮮)には関わるな。

高校時代、大学時代それぞれ在日韓国人の友を持ち、平成11年〜平成15年の4年間、韓国で暮らした私の目から見て、この教えはなるほどなと考えさせられます。今日の彼の活躍は、才能・努力もあるでしょうが、このお母さん・叔父さんの教育方針こそ最大であったと思います。

元々一つの国であったものが日本の植民地となり、終戦後やっとなら独立したと思ったら、連合国とソ連により南北に分割され、お互いが争うことになり、更に日本に住む朝鮮半島出身者までが南北に分かれ、反目しあう現状をその当時に既に推測されていたのではないのでしょうか。

解していったのか、日本人でも西洋音楽を演奏できるが、心が超えられないのではないかと悩んだそうです。彼はクリスチャンではないが、聖書にどんなのめり込んでいったそうです。恐らく今も

「ドイツ連邦共和国功労勲章」受章伝達式催される

ドイツ室内楽やバロック音楽を日本に紹介し、日本とドイツの関係促進に貢献したことが認められ、ドイツ大統領(ホルスト・ケーラー)ドイツ連邦大統領)から昨年11月、『功労勲章功労十字小授賞』を授与された。日本の指揮者では3人目。(朝比奈隆・鈴木雅明氏に継ぐ)

伝達式は今年1月9日、大阪市北区のドイツ総領事館で行われ、その時の新聞報道を次頁に掲載します。

産経新聞

平成21年(2009)日刊23750号

1|9[金]

産業経済新聞(サンケイ)
THE SANKEI SHIMBUN

発行所 ●産業経済新聞大阪本社 2009
〒556-8660 大阪市浪速区瀬町2-1-57
☎ 大阪(06)6633-1221(大代表)

夕刊



日本テレマン協会代表の指揮者

延原さんにドイツ勲章

日本テレマン協会を率い、ロック音楽の普及に努めて、約40年以上にわたりバシキタ同協会代表の指揮者、

延原武春さん(65)が、「日本とドイツの関係促進に貢献した」としてドイツから「ドイツ連邦共和国功労勲章功労十字小綬章」を受け、ことになり9日、ドイツ総領事館(大阪市北区)で伝達式が行われた。写真(飯田英男撮影)。

日本人指揮者で勲章を授与されたのは朝比奈隆さん(故人)、鈴木雅明さんについて3人目。式では、ゲロルト・アメルンク総領事から延原さんが勲章を胸に着けてもらい、笑顔を見せていた。延原さんは「私にとって、ドイツ音楽へのあこがれが今までの活動のすべてだったといっても過言ではなく、それをドイツに認めてもらうこと以上の喜びはない」と話している。